## 支那地理大系　自然環境篇

渡邊光編

東亞新秩序の建設、我等の理想は飽くまでも崇く、美しい。透んだ冬空に白雪を頂いて聳ゆる高嶺の樣に崇高である。しかし崇高であればあるほど登るに難い。山は嶮しく、徑は荊棘におほはれる。前途には幾多の難關が我等を待ちうける。この理想の實現はいばらの徑の故に準備が大切である。

一體、事をなすに臨んで伏して地理を見るべきは既に先哲の觀破りしところ、茫々として涯なき黃河と揚子江の平野、中原に鹿を逐ふものその地理を知らずして何ぞ。この意味に於て支那には各朝必ず地誌がある。禹貢をはじめとして漢書以降の二十四史にはいづれも地理志がある。今、我等の聖なる理想の實現にも地理書の要めらるゝは言ふまでもない。よき地理書の出現は興望のあつまるところである。幸、曩にバックの「支那農業論」ソープの「支那の土壤地理學」ワグナーの「中國農書」等々の譯もあつて、支那地理關係書の出版が時を逐ふて盛となり行く傾向にあるのは悦ばしい。この興望を擔つて又本書が世に送られた。本書の編著者渡邊光氏は曩に「世界地理」の監輯によつて地理學に對する新しい理念の所有者であることは既に萬人の認むるところ。かゝる同氏の編著になる本書が新秩序建設に如何に役立つかは同書を手にせずとも自ら推知せられよう。

本書は自然環境を、地形、氣候、土壤、生物、民族、河川、海洋、鑛物の八部門に分ち、各部門の執筆には夫々の專門家があたつてゐる。

第一篇、支那の地形は概觀に於て支那の地形區分をなし支那本部、蒙古新疆高原、西藏高原の三者に大別してゐるがこれらの中支那本部は渡邊光氏之が執筆にあたり、蒙古高原は花井重次氏、新疆高原及び西藏高原に關しては服部信彥氏がそれ〳〵章を異にして述べてゐる。支那本部の地形はこの篇の主要部分を占め、頁の過半がこれに費されて、叙述も精細を極めてゐる。山崎博士、李氏、バルボア、クレドナー、クレッシーをはじめ內外諸學者の論に基いて的確に述べられてゐる。これに續く蒙古の地形に於いては地形、地質の說明の他に同地方に於ける政治的沿革、探檢史をも加へて動もすれば無味乾燥に走り勝な自然地理的記述に潤ひを添えてゐる。筆者の讀者への思ひやりが寬はれて嬉しい。

第二篇の支那の氣候は福井英一郎氏の擔當するところ、氣候の概觀をなし、氣候區分をケッペン、マルトンヌ、シオン、等々の論に基いて精しく記し、終りには各地方の氣候を瞥見してゐる。支那の氣候に就ては研究資料の不充分なる爲めか、あまり精しくは研究が進んでゐない。近時漸く軍事上、產業上の目的で組織的な觀測網が張られんとしてゐるといふ。で、將來は精細な研究も可能であらうが、今のところはまだ〳〵概略のみしか知り得ない。筆者も緒言に於て資料入手の困難から「氣候の概要に觸れるにとゞめる」と斷つてゐるが、支那地理大系中の一篇にものされた氣候篇にあまり詳細なる研究を望むは無理であらう。寧ろ大要

をのべて支那の氣候の大摑みな概念を與へる方が望ましい。この意味で本篇が氣候の概要を示すに止まるとはいへ、それは些かもこの價値を失はしむるものではない。この篇中の記述が常に日本との比較に於て述べられてゐることは我々の理解を容易ならしめ、歴史や産業への關係が加味されてゐることは讀者の興味を增さしめる。

第三篇は支那の土壤、多田文男氏の擔當、第四篇は支那の生物、第五篇は支那の諸民族、いづれも鹿野忠雄氏の擔當、第五篇は人種學的な記述、第六篇は揚子江河川誌、第七篇は東支那海海洋誌、共に吉村信吉氏の擔當、第八篇は支那の鑛物資源、坪谷幸六氏の擔當、これによつて本書を終つてゐる。第六篇が古來、中部支那の交通に大きな役割を演じ來り、更に今後の東亞の新秩序に益々任務の重大なる揚子江の河川誌に費され、第七篇が今後益々緊密を加へるであらう日支交通の舞臺である東支那海に費され居ることは誠に時宜に適したものと言へよう。第八篇に鑛物資源の項の加へられてゐることも意義深きを覺える。とにかく全卷一つとして有益ならざるはない。

しかし假に妄評が許されるならば今すこし本書の頁の配分に意が注がれてもよくはなかつたらうか。全頁の大半を地形が占むるは止むを得ないとしても、支那の土壤に僅か二〇頁を費すに反して、支那の生物に六十頁近くを費し、氣候の六十頁餘を費すとほゞ同量の頁が占められてゐることは稍、當を失したるかの觀がないでもない。又本書の或部分には單なる事實の羅列に終るものが見うけられないでもない。これは自然地理的な記述として止むを得ないとは言へ、今すこし意識の濃厚さが欲しかつた。しかしともかくも文科に於て地理を學んだ自分が自然科學者にかく求めるのは或は無理かも知れぬ。

とにかく、本書の全卷に盛られるところが悉くその道の專門家の述作であり、言々、東亞新秩序に示唆を與へないものとてはない。本書が執筆に各々その人を得てゐることは、本書の價値をいやが上にも高からしむるもの、自分はこれに對して萬腔の讃辭を送つて惜まない。

本大系はこの自然環境篇の外に他篇が續いて刊行されるといふ。尙ほ一層本大系が興望に叫ぶ樣努力されんことを祈り、妄評のお詫に代へる。

（菊判四八九頁、日本評論社發行、定價五圓）（柴田孝夫）

## 回教圏要圖

### 回教圏研究所編

人口の地理的分布と密度とを、交通網其の他の人文的諸條件と共に記入して、直觀に訴へる地圖の如きは、地政學的諸考察に於て特に裨益する所多大である。今日喧しく論じられる回教徒の、世界に於ける地理的分布圖、所謂回教圏地圖は、從來、歐米に於ても概ね附圖的なものに止まり、獨立せる大地圖の作製は、至難の業として着手せられて居なかつた。善隣協會の經營する回教圏研究所は、今回、所員の努力によりこれが達成を企圖し、茲に一